

42007

教科書文庫

4
810
41 - 1909
200030
2236

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

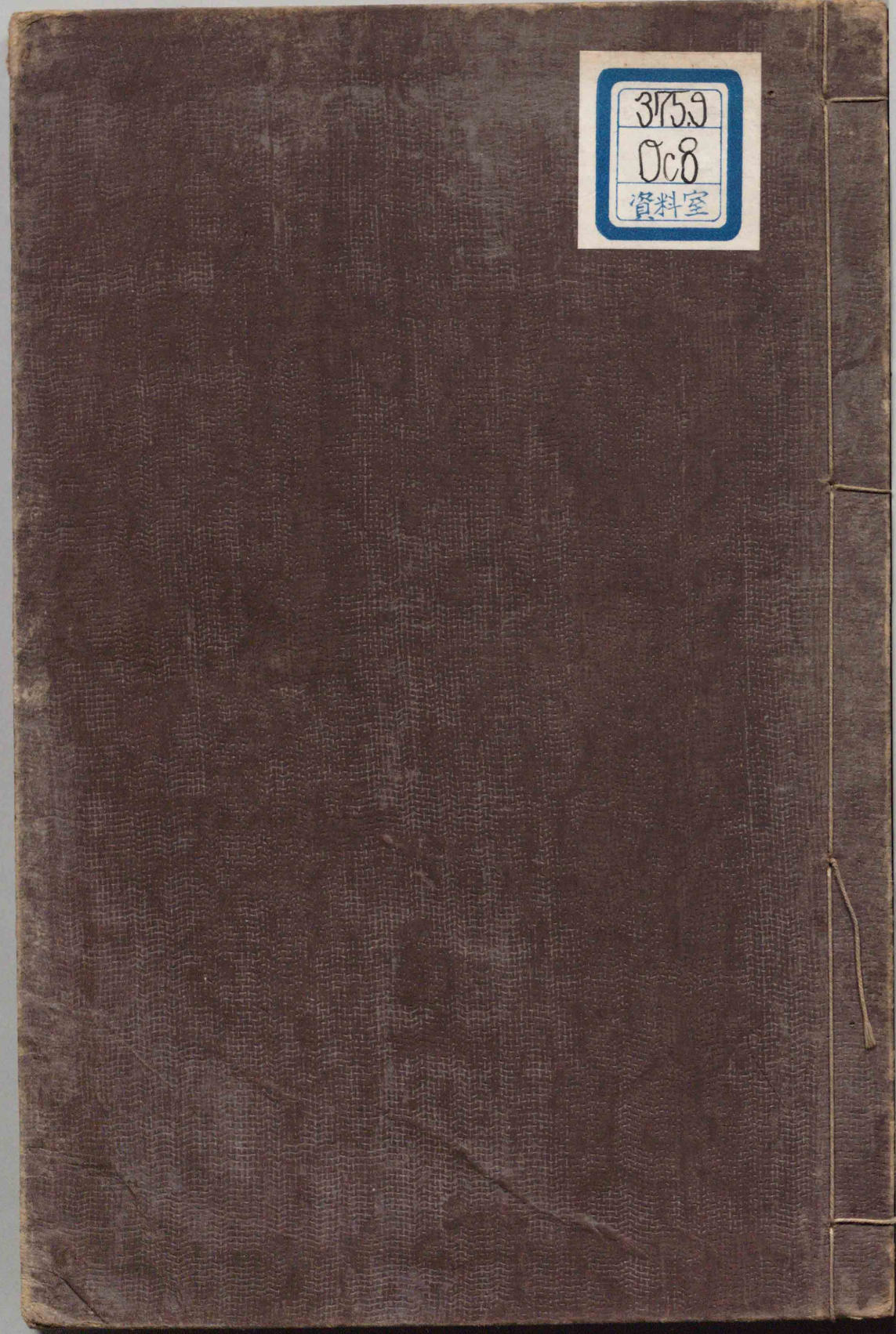
Kodak Color Control Patches

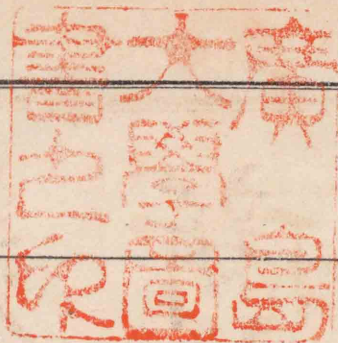
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



31759
Oc8
資料室





新訂中等國語讀本卷三目次

- 一、無學の旅……………一
- 二、霧嶋山に登る記 その一……………四
- 三、霧嶋山に登る記 その二……………九
- 四、植物の感覺……………一四
- 五、ジョルジ、スチブンソン……………一七
- 六、物價……………二五
- 七、石炭……………二八

新訂中等國語讀本卷三目次

375.9
008

教育部省檢定濟 中學教科書 明治四十二年 二月一日

落合直文編

森林太郎補
萩野由之補

新訂中等國語讀本

東京 明治書院

八、 藤樹先生……………三五

九、 半家村……………三八

一〇、 東京……………四三

一一、 武藏野（新體詩）……………五〇

一二、 螢……………五一

一三、 採用試験……………五八

一四、 書札の死活……………六五

一五、 文字……………六六

一六、 過不及（格言）……………七一

一七、 海軍兵の生活（書翰）……………七二

一八、 トラファルガルの海戦 その一……………七六

一九、 トラファルガルの海戦 その二……………八三

二〇、 ネルソンの鸚鵡……………八九

二一、 四季（今様）……………九三

二二、 良夜……………九五

二三、 京城……………九八

二四、 海外の一知己……………一〇三

二五、 船室の記……………一二二

二六、 小笠原嶋通信（書翰）……………一一八

二七、 殊勝なる武者振……………一二三

二八、 同情……………一二八

二九、 古今傳授松……………一三三

卷三目次終



新訂中等國語讀本卷三



一、 無學の旅

まだし

旅して口惜しきは、我が財をもつことの少きよりも、我が學を積めることのまだしきにあり。歴史に、詳しく通じたらんには、わづかに遺れる古の河の流、城の墟、或は破れたる寺、頽れたる塚などに臨むや、限なき感を起し、人知らぬ興を覺えて、身にしみ、心にとまる事も多かるべきを、何事のありし處とも知らず、

そこそこ

通塞

我が學の疎きまゝ、何の趣味も感ぜず、草鞋のみ多く穿き破りて、そこそこに通り過ぎなんは、口惜しきことの一つならずや。地理をよく知りたらんには、路の通塞をも、難易をも、胸によく曉り得るが故に、日暮になほ、宿るべき處を得て、迷ひ歩くなどいふ、愚しき目にも會はず、たゞ、僅の迂回せざりし爲に、惜しき名勝を見落すといふやうなる事も無く、よろづに付けて、心確に、便多かるべきなり。

大様

草木、禽獸につきての知識乏しきも、すべての物を、大様にのみ見て過すほどに、異なる郷の、珍しき花禽を

眼にしなから、唯、紅き花咲き居たり、白き鳥翔り居たりとばかり覺えて、何一つ、明に知るといふこと無く、後に、人に問はるゝことあらんをり、「知らず」とのみ答へんは、これまた、口惜しからずや。農工の事につけても、畫、彫刻の道につけても、亦さなり。無學にして旅するは、たとへば、夜行くが如く、すべての美しきものをも認めずして、過ぎなん。

學問は、急に、如何とも爲し難し。されども、注意といふことは、我が心の置方にて、深くも、淺くもなるべければ、旅にありては、如何なる物にも、事にも、つとめて、

趣味
豊(豊)

ふかく注意すべし。注意は、知識を生じ、やがては、その人を、趣味豊なる人となして、すべての事物について、興味を多からしむるものなり。さらば、その人、旅したるがために、少からぬ利益を得んこと、疑あるべからず。(幸田成行―露伴叢書)

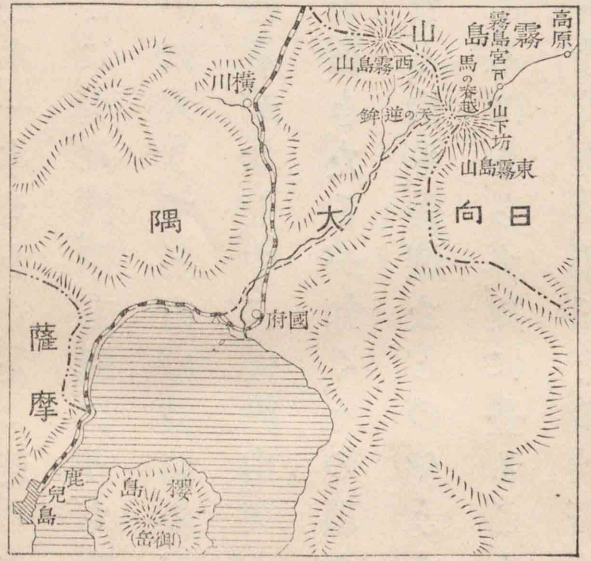
二、霧嶋山に登る記その一

垂迹

海陸二日路を経て、霧嶋山に入り、數十町のぼりて、霧嶋の宮居の前に著く。二神垂迹の地なれば、宮居、今に至りて、殊に美々しく、この近國にての大社なり。伏

黄昏

しをがみて、黄昏頃、かたはらなる山下坊といふ坊に



宿す。こゝにて、先達の案内者をやとひ、翌朝、同伴を乞へる若者と共に、夜のほどより登山す。雑樹生ひ茂り、日影だに洩れざるほどの山道を、たゞ、案内者の後に従ひつゝ、登りに登りしが、その間、

奇樹異草、聞きも知らず、見も慣れぬものいと多し。か

突として

急峻

雙(双)

くの如きところ、五十町を登り盡せば、それより上は、樹木一本もなく、たゞ芝のごとき草のみ生ひたり。そこに至れば、四方遙にうち晴れ、薩隅、日の三州、一望の中に入りて、衆山は、波濤のごとく、大海は、青疊を敷きたるが如し。中に、櫻嶋山、突として秀で、さながら、盆石を置きたるが如く、その頂より、白き煙、高く立ち騰るなど、恰も、香爐などのやうなり。景色無雙、筆の及ぶところにあらず。更に登ること五十町、それより上は、草もなく、たゞ、栗ほどの焼石ばかりなるが、山は、ますます急峻なり。登るに随ひて、天地のけしき、やゝ變じ、不

時に、下の方より、雨おそひ來り、或は、風、横さまに吹き來りて、また、眺望の違なし。

それより、二十町も登れるに、馬の脊越といふ處あり。この處は、登らずして、平に行くといへども、左右、皆谷にて、劔の刃の上を行くが如く、足の踏むところ、纔に、馬の脊中ほどなり。かくて、左の方は、萬仞の谷底にて、眼およばず。右の方は、深さ三四町、或は、五六町もある。谷に充ちて、猛火燃えあがり。この馬の脊越にかゝりて後は、山、常に震動して、地軸、今にも碎けんかと思はるゝなど、そのおそろしさ、いふばかりなし。或

地軸

萬仞

怪(恠)

一陣

は、腥く、えもいはぬ氣の吹き起つよと思ふ程に、忽ち、墨の如くなる雲うづまき來て、同行のものだにも、ひたすらに隠さるゝことあり。或は、前後左右に、異形の雲煙現れ、その狀、鬼神の如く、佛神の如きこともあり。或は、足もとより、虹たちのぼり、豎横に靡きて、織り成せるが如くなることもあり。或は、天地共に、金色となることもあり。その外、奇怪不思議なかないふもおろかなり。また、折々、一陣の烈風吹きくることあり。この時は、先達教へて、急に、うつ臥に倒れ伏さしむ。腹ばひにならざれば、風に、この身を取られて、猛火のうち

須臾の變幻

に落さるといへば、われらも、この風を懼れて、少しの風にも、急に、うつぶしになり、地に取りつき、風に放たれざるやうになせり。しばしにて、又、急に、風も止み、空晴るゝこともあるなり。須臾の變幻、さだまりあることなし。

三、霧嶋山に登る記その二

さて、この處にかゝりしより、かの若者、大に恐れ、足戦きて、立つこと能はず。されど、先達と、前後より介抱して、いろいろとはぢしめ、しばしが程は引き行きし

介抱

かど、後には、目見えず、顔色變ぜしかば、いかにともしがたく、殆ど迷惑せり。時に、先達のいふやう、今日は、山も、格別にあらし。殊に、かゝる人引き具し行かんこと、いかにも協ふべからず。登山も、これまでなり。これより下山すべし」といへば、力及ばず、本意なくも、それより下りしが、十町ばかりにして、天氣、また晴朗、風おもむろに、四方の眺望、はじめの如くなりぬ。暫く休息して、心を鎮めしに、若者も、けしき、常の如くなりて、「さきには、いかにして、さばかりはおそろしかりつるにか」と、うち笑ふ程なり。われ、つくづく思ふに、今、この若者

鎮(鎮)

遏むる

のため、予までも、絶頂を窺めずして、下山せんこと、生涯の遺憾なるべし。何とぞして、一人なりとも登り見んとて、先達に、「これより、絶頂までは、道の程、いかほどあるか」と問ふに、「馬の脊越の長さ八町、それを過ぎ、登ること、十町ばかりなり」といふ。さては、僅の道なり。まぎらはしき道やある」と問ふに、「兩方谷なれば、紛るべき道なし」と答ふ。さらば、予ひとり、絶頂に登りくべし。この處に、若者を守り居て、わが下り來るを待ちくれよ」とて、遏むるをも聞かで、再び登りぬ。さて、前の馬の脊越に至れるに、天地、忽ち變じて、ま

息をかざりに

た、はじめのごとし。例の、折々うつぶしになりて、風を避け、千辛萬苦して、馬の脊越八町が開走りぬけたるに、天地、また、常の如くにして、奇怪なし。たゞ、息をかざりに登る程に、遂に、絶頂に到れり。絶頂は尖りて、僅の地面に、天の逆鋒あり。そを見つけたる時のうれしき、何にか譬へん。逆鋒の有様、全體は、唐金の如くに見ゆれども、風雨にさらされたるものなれば、青く錆びて、何とも知りがたし。長さ一丈餘ばかり、太さ、大なる竹程にて、倒に、地中に立ち、その石突の端のところ、南面に、鬼面の如きもの見ゆれど、これも、風雨にさらさ

堂宇

徘徊

晦冥
怪異

ひた下りに

れて、鼻目、しかとは見え分かず。土中に入りたる先の方は、何程、深く入りたるか、知るべくもなし。かくて、絶頂には、只、この鋒、一本のみにて、外に、堂宇の如きものも見えず。しばらく、この絶頂に徘徊するに、天氣晴朗にして、四方、目の及ぶかぎり、心地よく見え渡れり。されども、かゝる處は、久しく留るべきにあらざれば、急ぎ下りたるに、馬の脊越に至れば、猶、前のごとく、天地晦冥にして、怪異甚し。恙なく、馬の脊越を越えて、ひた下りに下るに、遙の下に、先達、若者、幽に見えて、大さ、豆のごとし。嬉しくて、いそぐほどに、下るとはなしにす

べり落ちて、須臾の間に、二人の前に著く。恙なかりしことをのみ、共に悦び、その夜、宮居のかたはらなる、かの坊に歸り著きぬ。(橋南錄―西遊記)

四、植物の感覺

植物の體の一部分が運動する例は、色々ある。例へば、合歡木などは、日が暮れると、葉が、互に合して閉ぢ、朝になると、復開いて來る。かやうに、夜間は、眠るやうな有様になるから、「ねむ」といふ名が附いてゐる。尤も、この木に限らず、外にも、夜、葉が閉ぢて、朝開くものは、

現象

澤山ある。かの蒲公英の花も、朝は開いてゐるが、夜は、必ず閉ぢてしまふ。

接觸
鋭敏

色々の植物の、細い卷鬚を見ると、これにも、亦、著しい現象がある。たとへば、葡萄、胡瓜、蕃南瓜、西蕃蓮などの卷鬚は、細い絲のやうな形をしてゐるもので、今、その尖に觸れると、暫の間に卷いてくる。その時に、ちひさい固形體、例へば、極細い棒か、又は、板の如きものが、その傍にあると、直に、それに巻きつく。卷鬚が、極わづかの接觸によつて、巻き著くことは、最も著しい現象であるが、尤も、これは、卷鬚の種類によつて、自ら、鋭敏

遲鈍

遲鈍の別はある。感覺の鋭いものでは、細い毛や、又、細い絹絲のやうなものを、その上に掛けても、ぢきに、屈曲を起す。かの西蕃蓮の卷鬚などは、最も、その鋭いものゝ一例である。

こゝに、また、前に述べたものとは、別種ではあるが、やはり、植物體の感覺に就いての一現象がある。今、試みに、豌豆、蠶豆のやうな、豆の芽生の、極若いものを採つて、その眞直な、細い根を傷けぬやうに、又、乾かぬやうにして、豆のところを、針で、木栓に挿し止めて、さうして、根の先を、地平の方向に置くと、數時間、又は、數十時

地平

窓(窓)

間の後には、根のさきが、必ず、下へ曲つてきて、地球の中心の方へ屈折するであらう。それから、又、若芽のさきの方は、根と反對で、段々に、上の方へ向つて來る。また、薺、莖、或は、蕪菁などの種を蒔いて、その若芽が、澤山に出たのを、窓の前へ出して置くと、若芽の尖が、一兩日後には、必ず、あかるい方へ向つて、屈曲するであらう。(三好學—植物の感覺)

五、 ジョルジ、ステブンソン

ジエムス、ワットの、蒸氣機關を發明したるは、西曆一千

七百六十九年のことなりき。されど、これを應用したる鐵道の發明せらるゝまでには、なほ、數十年の歲月と、數多の人の苦心とを要したるなり。かくて、遂に、この發明の名譽を荷ひ得たるものを、英國人ジャルジ、スチブソンとなす。

スチブソンは、ニッカーカスルのウィラムなる、石炭坑の蒸氣機關の火夫の子なり。八歳の時、父と共に、デァレバーの鑛區に來り、初は、牧童となり、後に、鑛區に入りて、父の職を助けて、日給一志^{シツ}を得、幾何もなくして、更にまた、汲水ポンプの掛となれり。

その業務の暇ごとに、彼は、絶えず、粘土を以て、さまざまの機械を模造するをば、唯一の娛樂となしたるが、その技、中々に看過しがたきものありたりと見え、ある日、一技師は、頻に、彼を賞揚し、汝は、器械製造業に就くこそよけれ」とて、なにくれと、器械の事ども語り聞かせ、ことに、ワットが新發明なる蒸氣機關のことをば、精しく説明したるに、彼は、熱心に、それを聞き、さても、いかにせば、それらの事を知る事を得べきか」と問へり。それを知るべき書籍多きを」とて、さまざまの書籍を出して、彼に示しぬ。されど、眼に、一丁字なき少年の、

一丁字

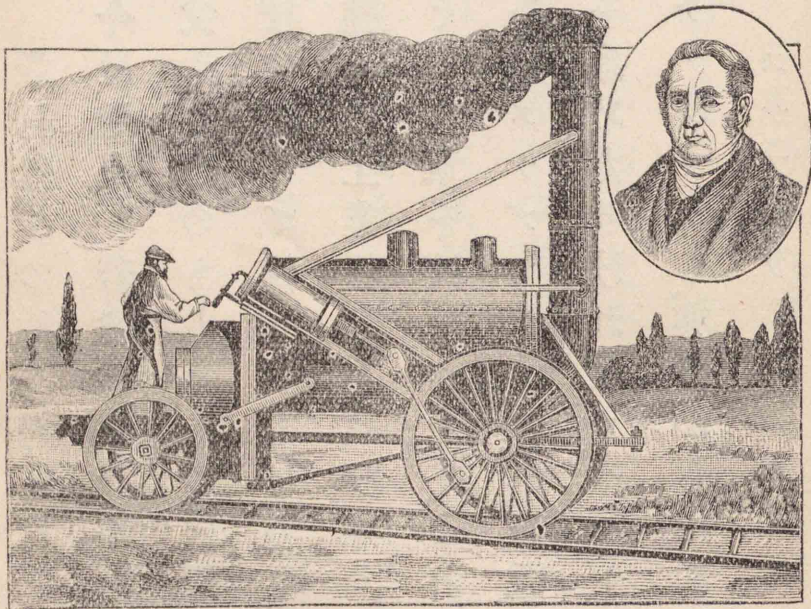
應用

いかでか、これを解することを得べき。彼はこゝには、はじめ、わが無學を覺りぬ。

彼は、志を決して、夜學校に入學し、隔夜に通學して、讀書と習字とを學び、ついで、數學を學べり。殊に、その應用問題につきては、非常なる熱心と勉強とを以て、これが解釋につとめたりきとぞ。

まもなく、一機關の長となりて、收入も、やゝ増加し、今は、若干の貯蓄も出來しかば、彼は、乃ち、妻を娶りて、一家を成しぬ。かくて、一子ロベルト生まれぬ。その後三年ばかり経て、コリングオーズの鑛區より招聘せ

機會
伎(技)



車關汽の初最とソンプチス、デルオジ

られぬ。

この間に、種々の機會に遭遇して、彼が眞伎倆は、世にあらはれ、遂に、鑛山主の信用を博して、一躍、機械長に任ぜられ、二百磅の年俸を受くることとなれり。

歲月は、夢の如く過ぎ行きて、彼の一子ロベルトも、今は、逞^{たくま}しき若者となり、性質、極めて鋭敏なりければ、父も、未だのもしきものに思ひ、彼を、ニッカーカスルの學校に送りて、修學せしめたり。毎日曜日に、ロベルトは、種々の工業雜誌を買ひ來りて、父と共に、これを讀み、その文章をば、ロベルト、これを解し、その實地の應用をば、ステブソン、これを説きて、父子共に、その研究を進めたりければ、ロベルトの學力の進むと共に、ステブソンも、亦、少からぬ智識を得たり。

ステブソンの熱心と伎倆とは、遂に、その鑛山主

宿願

の心を動しぬ。鑛山主は、彼が、多年の宿願なる、蒸氣機關の發明を大成せしめんが爲に、その資本を給せんことを約せり。ステブソンの喜、譬ふるに物なく、彼は、晝夜、その發明に、心を碎けり。やがて、一の機關を發明せしが、試運轉の結果は、その機關の、よく、八十噸の荷物を積める車を引きて、一時間に、四哩^{マイル}を走るに堪ふることを示せり。賞讚の聲は、そこゝに起れり。されど、ステブソンは、なほ、これを以て満足せず、進んで、その改良を圖れり。

かくて、リバープール、マンチエスター線の計畫はじ

考案

まれり。機關車は勿論、橋梁、トンネル、皆彼の考案によりて造られたり。一千八百三十年九月二十五日、工事、全く成りて、その開通式舉行せられぬ。式場の偉觀いふばかりなく、時の内閣總理大臣、各大臣をはじめとして、貴族、高官、代議士、紳士、皆、その式場に列し、壯大なる儀式果てて後、新機關車は、これらの貴賓を乗せて、徐に運轉しはじめたり。やがて、一聲の汽笛と共に、機關車は、その全速力を以て進みぬ。その迅速なること、まことに飛ぶが如く、一時間の速力、二十四哩と注せられぬ。一大驚歎の聲は、全國に響き渡れり。彼の成功

を祝する聲は、また、これに伴へり。

一職工スチブンスンの名は、今や、王公をも駕せんとす。されど、少しも、その舊時の困難を忘れず、固く、奢侈を禁じ、單純なる職工の生活を以て、無上の快樂となせり。一千八百四十八年八月十二日、六十七歳を以て歿しぬ。

六、物價

かりに、米一俵は、五圓にて買ふべく、麥一俵は、四圓にて買ふべしとせば、米と麥との間に、位の差あるを

奢侈

單純
無上

麥(麦)

需要
供給

見るべし。この例にては、米の位五にして、麥の位は四なり。位は、すなはち價なり。絹布の位は、木綿よりも高し、ゆゑに、その價も貴し。金銀の位は、鐵よりも高し。したがひて、その價貴し。

物の價の異なるは、主として、需要、供給の關係より來る。供給とは、物品の製造高をいひ、需要とは、これを買ひて消費する力をいふ。買ふ力、あまりありて、製造高不足なるときは、物品の價高く、品物多くして、買ふ人少きときは、品物の價低し。

需要あるもの、かならずしも、價あるにあらず。暑に

交換

苦むとき、誰か、涼風を欲せざらん。しかるに、涼風には價なし。錢を出して買はずとも、天然の供給あまりあればなり。

天然の供給あまりあれば、需要は大なりとも、價なきをさだめとす。これ、物に、賣買の價と、天然の價との別あるによる。米、麥などは、供給にかぎりあれば、賣買の價ありて、金錢と交換すべく、清水、涼風は、天然の價あれども、供給あまりあるゆゑに、賣買の價なく、隨ひて、金錢と交換すべからず。

たゞし、通例は、供給あまりあるものも、處がらに由

りては、價を生ずることあり。井を穿ちがたき土地などにては、飲用水得易からず、飲用水は、すべて、他處より荷ひきたる、隨ひて、水一荷につき、何拾錢といふ價を生ずるなり。鈴蟲、松蟲などが、田舎にては、價をなけれど、捕へて、都に持ちきたれば、若干の價を生ずるが如し。(坪内雄藏)

七、石炭

記念物
齎す

諸子は、松嶋見物の旅客の、その土産物として、記念物として、多く、埋木製の茶盆、茶卓の類を齎し歸ること

とを知るならん。蓋し、埋木は、仙臺地方の名産なり。古歌に、花咲くことも無しといはれたるこの埋木は、果して木なるか、はた、その質の堅く、重きを見れば、石なるか。

請ふ、諸子の爲にこれを説かん。

埋木は、すでに、木の部類を去りて、石炭の部類に屬せんとするものなり。その木質、なほ判然たれども、やや、黒色を呈し、將に炭化せんとするものなり。また、わが古史に見えたる、燃ゆる土は、即ち、石炭の一種なる泥炭ならん。この他、石炭には、褐炭、黒炭、無煙炭等の種

黒(黒)
炭化

利用

結果

想像
落莫

類あり。

今日、われ等が利用する天然物の中に就きて、その最も要用なるものは、何なるかと問はば、何人も、まづ、指を、石炭に屈するなるべし。今假に、この石炭をば、姑く、われらの手中より取り去られたりとして、その結果を想像せば、われらの産業社界は、いかなる落莫の觀を呈すべきぞ。すべての蒸氣機關は、殆ど、その運轉を停め、交通の最大機關たる、陸の汽車、水の汽船も、活動せず、この新世紀の文明は、まさに、一半の光輝を失ふに至らん。嗚呼、何人か、かゝるいまはしき想像に堪

遍(徧)

眩惑
心醉
遊蕩

ふるものぞ。

英國の工業は、世界の、最も隆盛なるものと稱せらる。その然る所以のものは、主として、英國が、石炭の産出に富めるによれりといへり。嘗て、世界の海國と稱せられて、領土、全地球に遍かりし、かの西班牙國は、かぎりなき多額の金銀をば、その新領土より齎し歸りて、頗に、その富に誇りたりき。されど、その結果はいかに、美しき貴金屬の光に眩惑し、その富に心酔したる國民は、相率ゐて、皆、遊蕩懶惰の風に移り行きて、國勢は、つひに衰へぬ。英國は、これに反して、その産出する、

多額

多額の石炭を利用して、頻に、その工業を勵み、遂に、今日の富を致すに至れり。かくて、彼等は、常に、我等の石炭は、貴き金銀にうち勝てり」といふとか。思へば、工業者が、これを賞揚して、「黒き金剛石」と呼ぶこと、決して、偶然にあらざるなり。

賞揚

生息

さて、石炭は、いつの時代に、いかにして成立したるものなるべきか。學者の説に依れば、石炭の地層は、極めて舊き時代の成立に屬すべきものにして、その時代に、地上に生息したりし植物が、地變の爲に、水底に埋没せられて、かくて後、出來せる上部地層の壓力

化成

と、絶開なき地熱との爲に、このものに化成せるなりといへり。しかして、その植物は、主として木賊、石松のたぐひなりとか。

繁茂
呈(呈)

當時の植物界が、いかにおそろしき發育をなして、いかに雄大なる繁茂の光景を呈したりしかは、われらの、到底、想像し得べきものにあらず。その石松の如きも、大抵、十間に餘れる高さありて、われら人類も、いまだ生息せざりし太古の自然界に、ひとり、その繁榮を競ひしなり。嘗て、外國のある鑛區にて、石炭の地質中より、太古の木賊を掘り出したることありしが、幹

自然界

掘る

埋没

の直径、五寸に過ぎたりといへり。實に驚くべきにあらずや。

活潑

はかなし

かくて、數百千年の間、この石炭は、深く、地中に埋没せられて、嘗て、世人の目に觸るゝこともなかりしが、わが國にては、遠く千數百年の昔、外國にては、ちかく數百年のむかし、偶然に發見せられたり。されど、その初は、たゞわづかに、山村のはかなげなる小屋の中の燃料に用ゐられしのみにて、さまで、世人の注意を惹かざりしが、工業の進歩に連れて、いつか、その效用のいちじるきを認められ、遂に、活潑なる、すべての産業

社界の舞臺に上るに至れるなり。

八、藤樹先生

王陽明の流

中江藤樹先生は、俗稱を、與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれき。學、王陽明の流を汲みて、その徳行、一世に秀で、遠近、皆、その風を望まざるはなかりきといふ。

先生の没後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと、先生の墓所、小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、先生の墓所はと問へるに、農

夫は、畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせんとて、士人を導きて行きけり。程なく、小き藁屋の前に出でけるが、しばし待たせ給へ」とて、農夫は、内に入り、やがて出で来るを見れば、木綿の、新しき著物のうへに、紋つきたる羽織を著たり。士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて、附きゆくほどに、やがて、墓所に至りぬ。農夫は、竹垣の戸を開き、「いざ入りて、拜し給へ」といひて、その身は、戸外に退きて、恭しく拜伏せり。士人は、この様を見て、再び驚き、さては、衣服を更めしは、われに對する敬禮の爲にはあらで、先生を敬する爲

にてありけるよと思ひつきければ、農夫に向ひて、「汝は、藤樹先生の家來筋のものなるか」と問へり。農夫は、詞を改めて、「さには候はず。されど、この村のものは、一人として、先生の御恩を蒙らざるものなし。われらが、親を敬ひ、子を慈むことを辨へ知りたるは、皆これ、先生の御恩なれば、子々孫々、必ず、その御恩を忘るべからず」と、わが父母、常に教へ候ひき」と答へたり。士人は、そのはじめ、たゞ何となく、一見せんとの心にて來りしが、この農夫の舉動によりて、俄に、敬慕の念を起し、懇に、その墓前に禮拜して、歸りきとぞ。

敬慕

化育

この一事以て、先生の徳行のいかに高くして、また、その化育のいかによく、下におよびしかを見るに足らん。(橋南谿—東遊記)

九、半家村

世ばなる

土佐國幡多郡の半家村といふ里は、四萬十川の水源にて、左も右も、水を挾みて、巖壁切り立ちたれば、世ばなれて、人げ疎き處なり。古くは、家、五六十戸ありしが、おひおひ、人口おほくなりて、今は、七十一戸になりとぞ。その風俗敦朴にて、すこしも、今様めける事に

敦朴

督促

破産
凶荒
流離

移らず。農工商うちまじり、産業異りといへども、情誼ともに篤くして、吉凶禍福あひ救ひ、田租をはじめ、およそ、公に納むる物、皆、期に先立ちて獻り、曾て、郡吏の督促を受けしことなし。されど、或は、齡老いし親の侍養のため、或は、自己の疾病のため、業を怠るたぐひ、山中の民といへども、もとより遁れぬことなれば、おのづから、富めるも、貧しきもありて、悉く均しくはあらず。もし、さる者ある時は、村中語りあはせて、俱に共に、力を添へ、賦役を調へしめて、破産に至らざらしむ。故に、凶荒の歲に遇ふといへども、更に、逃亡流離の者な

恆(恒)
浮浪

し。されど、又、たまたまは、恆の産なき浮浪の者もなきに
あらず。これをば、閒人と呼べり。閒人のたぐひは、何
處にもありて、皆、公役を勤めぬものなるを、この半家
村の閒人等は、公役をつとめて、恆の産ある者に同じ。
ある役人、これを怪みて、汝等は、公役すべからざるも
のなり。然るを、猶つとむるは、村人おのれ等が勞を分
たんが爲に、汝等におしおよぼすにあらずや」といひ
ければ、閒人等、同じ聲に答へて、「さには侍らず。おのれ
ら、不幸にして、閒人となれりと雖も、朝夕、やすく、この
村中に眠食するは、みな、公の御蔭なれば、その國恩報

無頼の徒
頼(頼)

いずてやはあるべき」といへり。さる者どものなかに
は、無頼の徒もあるべきを、この村の閒人は、かくのご
とし。

今は昔、享保の末にやありけん、八右衛門、新右衛門
といふ二人の者ありけり。同じ程に、病に臥し、久しく、
家業を廢して、いつしか、貧乏になり、にければ、家に傳
へ持ちたる田畑を、公にたてまつりて、閒人にならん
とせるを、庄屋某聞きて、「かの二人は、所に就きて、舊き
家柄の者どもなり。然るを、病ゆゑに、産を破らしめん
は、誠に憫むべき事のかぎりなり」と、村人を諭して、か

看(看)

褒賞

はるがはる、その田畑を耕し作らしめ、遂に、閒人になる事を免れしめけり。そのよし、國主に聞えけるに、村人等が看護の勞をめてて、米四十三俵を、各戸に分ち賜ひけり。されど、さばかり厚き褒賞をも、あながちに、榮としも思はず。さるは、かく、互に救ひ合ふなどの事は、皆、當然の職分なりとして、公の賞賜を、却りて怪しく思ひければなり。

かく、七十餘戸、悉く、一家の思をなして、世を過すまゝに、宅を構ふるにも、村中相戒めて、いかに、餘財のある者にて、も、廣き造作をば、堅く禁じ、梁木三間に餘る

均分
收穫

かこつ

をば用ゐしめず。また、その土産の茶、楮皮、葛粉、蕨繩の類の物は、これを均分し、又、租米をたてまつるにも、收穫の多かりし者は、少かりし者を助けて、互に相救ふを以て、いかなる年にて、も、獨、我のみの不作をかこつ者は、あらず。されば、さきに、いへる閒人といふもの、稀には、無きにしも、あらざれど、貧富の差、そのみなければ、村中、同じほどに、附き合ひ、同じほどに、睦みあへる、まことに、珍しといふべし。(近藤芳樹—明治孝節錄)

一〇、東京

霸府

民草

丘陵
平坦

屬(屬)

武藏野の末なりけん、遠き昔は知らず、霸府の地となりてより、三百年の星霜を経、今また、こゝに、今上天皇、都を奠め給ひてより、三十餘年の月日を重ねて、民草は、繁りに繁り、榮えに榮えて、まことに、東洋第一の帝京たるに至れり。

地勢は、西南は、丘陵相連れども、東北は、概ね平坦なり。西南の丘陵相連れるところを、山の手といひ、東北の平坦なるところを、下町といへり。麴町、麻布、赤阪、四谷、牛込、小石川、本郷は、山の手に屬し、神田、日本橋、京橋、下谷、淺草等は、下町に屬せり。下町は、江戸開市の後、夙

市井

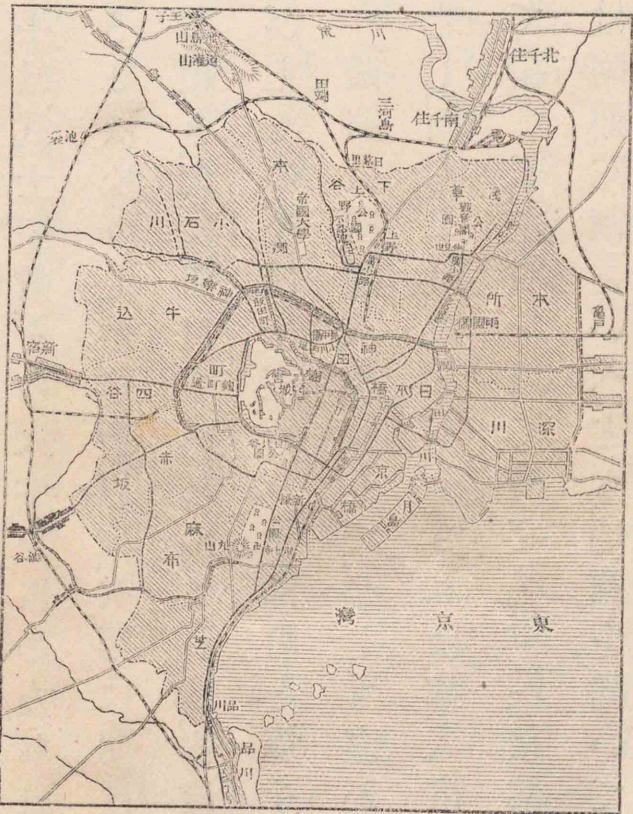
維新

面目を革む

四通八達
迂曲

に、市井をかたちづくりて、繁昌を極めたれども、山の手は、武士屋敷、その大半を占めたれば、なべて物寂しきさまなりしが、維新以來、次第に開けて、多く、町家立ち續き、大に、面目を革めぬ。されば、古は、八百八町と呼びしもの、今は千三百八十餘町と算するに至れり。道路は四通八達にして、必しも直からず、迂曲して、北し、西し、或は東し、南す。されば、都人は、常に、東西を以て指さず、左右を以て辨ぜり。俗に、京都は碁盤割、江戸は阿彌陀割といへども、地圖を繙いて見れば、その入りくみたること、更に、阿彌陀割の比にあらず。

都下の區々、殆ど、一市の姿をなさざるはなく、一區、



熱開

公園も、京橋、麻布、赤阪、神田の四區を除くの外は、各

概ね一二箇所
の盛場所あり。
そこには、飲食
店あり、勸工場
あり、寄席あり。
玉突、大弓等の
店ありて、常に、
熱鬧を極む。

境域

區に、これなきはなく、明治六年三月、上野を、公園となししより、漸くに増して、今は、十八箇所あり。就中、境域の、最も廣大なるは上野公園にして、芝公園、これに次ぐ。一は古の東叡山、一は増上寺の地にして、共に、徳川氏の靈廟の在るところなり。

上野公園は、不忍池を擁して、風景絶佳、春時、櫻花を以て世に聞えたり。博物館、動物園等、また、この域内にあり。博覽會、美術會、園藝會をはじめ、種々の展覧會、こもごも開かれ、四時、遊覽の客充ち満てり。芝公園は、増上寺山門の邊、青松おほく、色彩相映射し、頗る、幽趣に

映射
幽趣

富(富)

富む。丸山の上よりは、東京灣の帆影を望み得べく、自ら、胸襟を闊うす。

壯麗

賽詣

陳ぬ

淺草公園は、淺草寺の地にあり。觀音堂は、殿宇壯麗にして、丹碧、こもごも耀き、都人の賽詣、雲の如し。仁王門前より、雷神門の址に至る間、中見世と稱へて、煉瓦造の店舗、道を挟みて、軒を列ね、多くは、簪、筭、木偶、玩具、菓子、煎餅、あるは、錦繪、繪草紙の類を商ひ、見世棚の、新を陳ぬ、奇を飾り、艷美を競うて、行人の眼を奪ふこと、一場の花壇に似たり。されば、旅人も、參詣人も、この處に、土産をもとむるなど、殊に、雜沓を極む。奥山は、古は、

百戲

觀る者塔の如し

脩竹

行樂

曳く

百戲競ひ集り、見世物、興行物の奇を鬪はししが、今は、その繁昌、埋地に移りて、いよいよ盛に、觀る者、塔の如し。日比谷公園は、宮城の外濠に沿うて、新に開きたる、洋式の公園にして、脩竹茂林、よく、天然の景に擬し、池あり、橋あり、大運動場あり、音樂堂あり。又、盛に、四季の花木を培栽して、以て、四民の行樂に適せしむ。その他、近郊には、飛鳥山、王子、道灌山の三公園あり。いづれも勝境にして、杖を曳く遊客、常に絶えず。都下の人口は、歳を逐うて増加し、殆ど、京都、大阪、名古屋、横濱の四市の人口を集めたるに當れりといふ。

また、盛ならずや。(平出鏗二郎—東京風俗志による)

一一、武藏野 (中學唱歌)

見渡すかぎり、はるばると、
 空もひとつの、草のはら、
 野末の露に、まがふ星、
 尾花の袖に、かゝる雲。
 草より出でて、また草に、
 入りし昔や、とひてまし、
 人草しげく、咲き匂ふ、

花のみやこの、月影に。

一二、螢

「螢は、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだ
 く。五月の闇は、たゞ、このものの爲にやとまでぞ覺
 ゆる。」

と、也有が、百蟲譜に書いたのも、ほんに尤もである。そ
 の、亂れ飛んでは、降りみ降らずみの空に、何の星かと
 疑はれ、草村に宿っては、時ならぬに、何の花かと怪ま
 れる奇觀は、他に、比すべきものもない。されば、昔から

すだく

降りみ降ら
ずみ

時ならぬに

奇觀

聯想

どこの國民でも、皆、これを愛してゐる。
螢といへば、誰でも、直に、火といふ聯想をひき起すであらう。現に、わが國の「ほたる」といふことばは、火垂ほたて、又は、火照ほてるといふ意から出たのだといはれて居る。又、支那をはじめとして、どこの國の詞でも、螢といふ名は、皆、火に、縁あるものばかりである。まことに、この火といふ聯想が、螢の命ともいふべきものであつて、若し、これがなかつたならば、恐くは、人の心を惹くことが、これ程でなかつたであらう。それは、同じ螢科に屬してゐる昆蟲類で、その形が、螢に、よく似たものも少

景物

くないにかゝはらず、その、美しい光を缺いてゐる爲に、動物學者以外の人には、少しも知られないのを見ても明である。
さて、この螢をば、春の花、秋の紅葉のやうに、一種の景物として、昔から、詩歌、文章に作った例が、ことに、東洋の國々に多いのは、今更いふまでもないことであるが、更に、これを、燈火の代に用ゐた例も、あの支那の晉の車胤の故事の外に、わが國にも、西洋の國々にも、また少くない。

北アメリカのメキシコの海岸では、その昔、海賊が

横行して、しばしば、通行の船舶を劫したので、そのあたりを通る舟人は、皆怖をなして、海賊の眼にかゝらぬやうにとつとめた。そこで、夜中の航行には、船中に、燈火を用ゐることを禁じ、その代として、この地に産する、大きな螢を集めて入れた籠を、乗客に渡して置いたといふことである。こんなやうな例は、わが國の昔にもあつて、これを、忍の提燈に用ゐたことが、古い小説などに見えてゐる。又、ピートル、マーターといふ人の、アメリカ發見後、三十年ばかりを経た頃の、あちらの事を書いた、新世界といふ書には、その地の土人

が、暗夜に、深林を行くに、大きな螢をば、足の拇指に縛りつけて、その光で、道を行く、やがて、螢が弱つてきて、光が薄らぐと、更に、新しいのと取りかへて行くといふことが載せてある。

たどる

現に、わが近江の守山、今宿地方では、螢の光で、夜道をたどる習慣があるとのことである。その地方は、總じて、螢が多く、小川に沿つた田圃道たんぼみちには、その岸の草村に、數限ない螢が聚つてゐる。そこで、杖で以て、草村をたゞくと、螢が、強い光を放つから、どんな暗の夜でも、明に、その行手を見分けることが出来るといふ。さ

れば、この邊の人は、提燈のかほりに、一本の杖を攜へるさうである。

絲(糸)

夜光の珠

又、キューバ嶋の邊では、螢を、絲に繋いで、婦人の胸飾、又は、髪飾としてゐる。この邊の螢は、大きさが、一寸餘もあつて、光が、大層強いから、その飾は、まるで、夜光の珠で飾つたやうで、美しさは、いひやうがないといふことである。又、ベーコンといふ學者の書いた、古い博物書には、小兒達が、螢を、透明な瓶の中に入れて、川の中に沈めて、その光に寄つてくる魚を捕へた話載せてある。

透明

眞(真)

又、ある畫師は、螢の光で、螢の畫をかいたといひ、近い頃、佛國では、その光で、寫眞を撮つた人もあるといひ、わが國でも、ある地方では、養蠶の期節に、螢を、籠に入れて、蠶室に備へつけて、夜、鼠の襲つてくるのを防ぐといふ。

このやうに、螢の光を、燈火の代に用ゐることは、各國ともに、昔から行はれたことで、想ふに、まだ、燈火の發明がなかつた、開けない時代には、その需用が、頗る廣かつたものであらう。(渡瀬庄三郎「螢の話」による)

一三、採用試験

ある商會にて、一人の見習店員を雇ひ入れんが爲に、新聞紙上に、その旨を掲げて、志願者は、その定の日、商會に來りて、親しく、主任者の試験に應ぜらるべしと廣告せる事ありき。その商會は、名高きものなりければ、その道に、志あるものは、われもわれもと應じ來りて、その日の午前九時には、はや、志願者の數六十何人とするされぬ。

主任

かくて、一同は、とある廣閒に導かれ、そこにて、主任者の出で來らんを待てり。かゝる閒にも、心にかゝる

藏じ

滔々として

空想

は、今日の試験なり。いかなる問をか起されん。定めて、商業に關する智識、又、今後の、わが目的などにてやあるらん、算筆はいふも更なり、地理や、歴史や、苟も、商業に關するほどの智識は、皆藏めて、わが腦裏にあり。殊に、その目的に至りては、われには、かくかくの、遠大なる目的あり。問はれなば、滔々として辯じ去らんなど、互に、種々の空想を描きて、待ちあへり。

やがて、かゝたの戸を開くと共に、「主任なり」と名乗りて、年長けたる人、そこにあらはれぬ。こゝぞと思ひて、人々、皆、胸を跳らせ、さて、順次に、その前に呼び出さ

郷貫
經歷

るゝに連れて、進み出でたるに、主任なる人は、いと平然たるさまにて、別に、これぞといふ問をもなさず。ただ、簡単に、年齢、郷貫、經歷など尋ぬるのみにて、やがて、事竟てぬ。

意氣揚る

人々、皆、不思議の思をなしてあるほどに、主任なる人は、一同に對ひて、懇に、今日の、遠來の勞を謝し、重ねて、また願ふこともあるべし」とて、その中より、唯一人の、年若き志願者を留め置きたるのみにて、他は、皆歸したり。その若者は、衣服も、極めて粗末に、はじめより、片隅の方にありて、意氣、頗る揚らざるものなりけれ

ば、人々はあざ笑ひて、眼の無き主任者かななどいひ散して、出で行きぬ。

その若者は、遂に雇ひ入れられしが、主任者の見込は、誠に違はず。その正直なること、その勤勉なること、しかも、物に機敏なること、實に、いふばかりなし。かくて、その事務に慣るゝに連れて、才智は、ますます發揮せられ、はては、店中第一の、有用なる人物となれり。

他の店員も、そのはじめ、いかにも無造作なる、主任者の試験よと思ひ居たりけるが、こゝに至りて、更に、その眼力のおそろしきに驚き、ある日、主任者に向ひ

無造作

機敏
發揮

事もなげに

て、その事を問ひぬ。

得意

しとやかに

主任者は、事もなげに笑ひて、我は、決して、無造作な
る試験をば爲さざりき。われは、まづ、志願者の入り來
る時より、かたへの室に在りて、一々、彼等の舉動に注
意せり。さても、われこそといはんばかりに、各、胸突き
出して、さも得意げに、つと入り來る人々の中に、かの
若者の舉動の、いかにもゆかしげなるは、早くも、わが
眼を射き。彼の若者は、まづ、その入口にて、丁寧に、その
靴の泥を拭ひ、しとやかに、その帽子を脱ぎぬ。かくて、
いと靜に、戸を開き、また、靜に、それを閉しぬ。これ、既に、彼

明晰

の、注意深き性質の知らるゝにあらざや。彼は、また、室
に入りて後、あとより來りし、一人の、年長けたる人に
向ひて、みづから立ちて、その椅子を直しぬ。これ、明に、
その、丁寧に、して、禮義に厚きこと、の知らるゝにあら
ずや。かくて、余の間に、對する彼の答は、まことに明晰
にして、しかも正確なりき。これ、その、信ずるところの
固きものあること、の知らるゝにあらざや。我は、又、さ
きに、一冊の帳簿を、わざと床上に落し置きたりしが、
かの、多數の人々の中、何人も、これを氣附けるは無か
りき。さるに、彼は、室に入ると等しく、たゞちに、これを

沈著の態度

喧噪

認め、やがて、人の注意を惹かぬやうに、そと、これを、机上に上げて、その塵をうち拂へり。また、彼は、絶えず、沈著の態度を保ちて、他の人々の如き、喧噪の風をあらはさざりき。われは、また、彼の衣服の粗末なるにかゝはらず、よく始末せられ、その靴は、よく磨かれて、少しの汚點をも留めざるを認めたりき。凡、これらの事、以て、彼の性格の、いかにもゆかしきことを證して、餘あるにあらずや。われが、彼を採用せしは、即ちこゝなり。かくて、その結果は、諸君の知らるゝ如し。抑、人の性格は、常に、一舉一動の中にあらはるゝものなれば、諸君

凡(凡) 性格

十二分の注意

書札

も、平生心して、その上に、十二分の注意をなさざるべからず」といひしに、店員は、皆、げにもと點頭きたり。

一四、書札の死活

書札の文字にも、死活あり。たとへば、「一筆啓上仕り候」より、「御無事、御堅固云々」「私宅恙なく、時候御自愛、猶後音を期す云々」は、書くも書かぬも、な程の事もなきなり。さるを、「この間の寒氣には、我が郷は、海濱に、氷を見たり、或は、半月、一月の早なるに、餘所には、夕立しながら、こゝには降らず」などいへば、同じ寒暖を敍ぶ

るにも、その地の氣色のあらはれて、書狀の文字、おのづから活くるなり。月日の末に、「この書認めたる時は、雨、しきりに降り、杜鵑、二聲三聲音づれぬ」など書きたるは、いよいよ、その時、その人の姿も思はるゝやうにて、おもしろし。長さ三尋あまりある書札にても死にたるあり、わづか三行四行にても活きたるあり。注意すべきことにや。菅晋帥 筆のすさび

一五、文字

文字は、人の思想を書きしるす、一種の符牒なり。文

思想
符牒

經驗

字あればこそ、人は、遠方に在る者とも通信し、後世へも、思想を傳ふることを得、數千年前の事をも知りて、今の經驗に照し、知識を弘むることをも得るなれ。文字なかりせば、人と禽獸と、甚しく異なることなかりしならん。文字は、文明の要具なり。

野蠻

太古の世には、様々の形に、繩を結びて、約束のしるしとなししこともあり。今も、野蠻の國にては、それに類することを行ふもあれど、それは、いまだ、文字とは名づくべからず。文字は、思想を書きしるす符牒にして、多數の人の承認せるものたるべし。

承認

草書	行書	楷書	隸書	篆書	古文
ト	上	上	上	上	上
ハ	下	下	下	下	下
左	左	左	左	左	左
右	右	右	右	右	右

支那 古代文字	エジプト 古代文字
☉ 日	☀ トリコ
☾ 月	老人
山	涙
水	飛ブ
魚	結ブ
鳥	切ル

文字の始は畫なり。支那の古代の文字、エジプトの文字などを見ても知るべし。然るに、人智の發達につれて、畫は、畫として發達し、遂に、今用ゐる如き諸種の文字とはなれるなり。

文字の種類は多けれど、古來、最も廣く行はれたるは、三種のみ。象字と、意字と、音字と

なり。象字とは、物の象より思ひつきたるものにて、畫に似たる、支那、エジプトの太古の文字、これなり。☉は日の形なり、☾は月の形なり、山、水、川の形、水、川の形に似せて書きたるなり。

日、月、山、水の如き、形あるものは、象字に表すことを得べけれど、右、左、上、下などいふ如き、無形のものに至りては、如何にすべき。こゝにおいて、意字とて、符號にて、意味を表す法起りぬ。たとへば、一線を引きて、平面の符號とし、その上に、點を附しては、上といふことの符號とし、その下に、點を附しては、下といふことの符

號とするが如し。數字の如きも、一種の符號字といふべきなり。

次に、音字といふものあり。こは、字の、最も進歩したるものなり。専ら、音聲に基きて、作れり。いろは四十八字の如き、西洋のABC文字の如き、これなり。

要するに、文字は、形の簡略にして、思想を表す力の自由なるものを、最上とすべきなり。この標準よりいへば、音字に優るものなく、音字中においては、いろは文字、ローマ文字などを、比較的優等とす。(坪内雄藏)

簡略

標準

比較的

一六、過不及

過ギタルハ、猶及バザルガゴトシ。(論語)

舜モ人ナリ、我モ人ナリ。(孟子)

遠キ慮ナキトキハ、必ズ近キ憂アリ。(論語)

巧ナル詐ハ、拙キ誠ニ如カズ。(鹽鐵論)

己ノ欲セザル所ハ、人ニ施スコト勿レ。(論語)

病ハ、口ヨリ入り、禍ハ、口ヨリ出ヅ。(口銘)

好事、門ヲ出デズ、惡事、千里ニ傳ル。(事文類聚)

玉琢カザレバ、器ヲナサズ、人學バザレバ、道ヲ知ラズ。(禮記)

新生活

一七、海軍兵の生活

前略。御約束に任せ、新生活の模様申しあげ候。はじめは、心もとなく存じ候ひし生活も、おひおひ慣れ候うて、楽しく相なり候。まづ、朝は、まだ薄暗きに、甲板がかりの士官、大聲にて、「起きろ」と命令いたし候。それを聞くと同時に、一同、釣床を離れ、起き出でて、上甲板を洗ひ候。かくて、朝飯濟めば、平服に著かへ、木具、金具などを磨き、或は、中下の甲板を拭ふがさだ宛に候。午

點檢
操練
休憩

概畧

前八時には、軍艦旗を掲ぐる式あり、一同、恭しく、軍旗に對して、敬禮をいたし候。つゞいて、軍器の點檢あり、それより、各、自分相應の操練に従事致し候。晝食後は、一時閒休憩いたし、やがて、午後のお操練に取まかり候。かくて、夕食となり、一同、食堂に集り、夕食濟みて、夜服に著換へ、朝同様、再び、軍器の點檢を受け候。日没後に、軍旗を取り、わろす式を行うて後は、もはや、別段の用はなく、たゞ、釣床を吊ると、眠ま就くとのみに候。通常の日課は、概略、右の如くに候へど、遠洋航海

有數
寄港

中に、随分壯快の事も多く候。就中、大うなばらの眞中にて、日の出、月の出等を眺め候は、まづ陸上にて、經驗し難き愉快かと存じ候。印度洋あたりにて、暑さ酷しむ晝を過して、夜になり、波はしづまり、風はまどしく吹きたつ時分に、舷に立ちて、波間を出づる、銀の如き明月に向ふ心地などは、口にも言ひ得べからず候。
或は、檣の林立せる、世界有數の大港に寄港いたし、或は、未開地に立ち寄りて、珍しき人種に接し、或は、熱帶、又は、寒帶にて、奇異なる動植物を採集

舊知

同胞

し、或は、始めて遇へる外國水兵と、一見、舊知の如くに、ポートルイスの壯遊を演じ、或は、思ひがけなくも、異境にて、同胞に逢ひ、共に、昔を語る樂しきなどは、皆、海軍生活の賜と申すべく候。常は、小き軍艦を、唯一の世界といふし居り候へども、いざとなまば、大洋を、庭池ほどに心得ての生活は、又とあるまじく存じ候。
すべて、兵役に服するは、國民一般の義務にて、その任務の容易ならぬこと、勿論に候へど、殊に、近來は、海軍力の、國勢におよぶす影響、いよいよ重

不覺
少閑

大に候ゆゑ、小生等の責任、一層重大と心得候。事に臨みて、決して、不覺の振舞は致すまじく候間、何卒、御休意下さるべく候。まづは、少閑にまかせて、概況、御通信申しあげ候。敬具。(坪内雄藏)

一八、トラファルガル海戦その一

睥睨
震懾
屏息

ナポレオン一世、身を陸軍の一將校より起して、忽ち、佛國の帝位を踐み、四方を制壓して、天下を睥睨するや、列國の群雄、皆震懾屏息して、その部下に屬せしが、ひとり、英國のみは、孤立を守りて、あへて屈せず。そ

優勢

畢生

粉碎

天職

の嶋國たるを利用して、優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、しばしば、佛軍を惱したり。こゝにおいて、ナポレオン、畢生の力を盡し、雄兵十五萬を、ブローニウに集め、船舶二千三百餘隻を、海岸に浮べ、まづ艦隊を、四方に分ち、以て、英國艦隊を、他に導き、その虚に乗じて、陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峡を一躍して、英國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督ネルソンは、豫てより、ナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に、自由を與ふるを以て、おのれの天職なりと確信し居たりしが、いま、ナポレオン

尾す

大舉して、英國を侵略せんとすと聞き、佛帝、たとひ、鬼神の術ありとも、その海岸を距る一海里の外に出でしめじ」といひて、たゞちに、敵の艦隊を追尾して、カヂス港の附近にいたりぬ。時に、佛國の提督ビールスーグ、西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して、英國艦隊と戦はんの用意をなせり。ネルソン、これを悟り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みて、トラファルガル岬の邊に達し、遂に、敵の艦隊と相會す。時に、西曆一千八百〇五年十一月二十九日なり。

總(總)

ネルソン、敵の横陣を布くを見て、喜色、面に溢れ、總

後殿

艦隊を分ちて、二隊の縦陣とし、副提督コリングウッドをして、その一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべきを命じ、みづからは、他の一隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、まづ、その一部を撃破せんとせしが、佛將ビールスーグ、これを察し、その艦隊を、二列に排布し、前隊各艦の間にあたり、後隊の各艦を列せしめ、相依りて、空隙なからしめぬ。

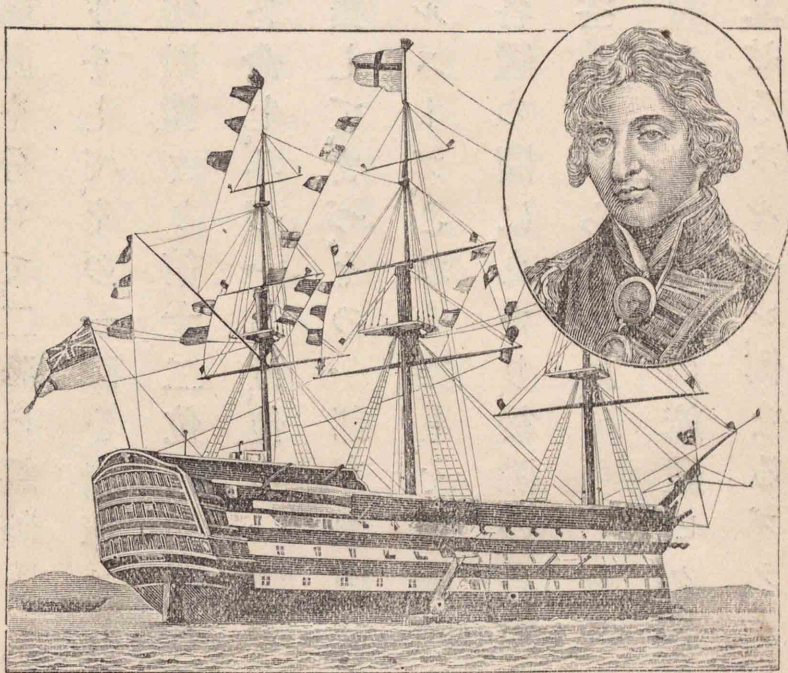
排布

時に、英國艦隊の旗艦ビクトリー號の上甲板に佇立せるネルソン、側なるブラックウードを顧みて、「君は、

捕獲

是認

偉功



幾何の敵艦を捕獲せば、わが勝戦なることを是認すべきか」と問ふ。ブラックウッド、「十五隻を捕獲せば、以て、偉功となすに足らん」と答ふ。ネルソン、頭を振り、「否、われは、二十

燦爛

肅然として

塗炭の苦

仁慈

應護

隻を捕獲するにあらずば、満足すること能はざるべし」といふ。やがて、その室に赴き、正装して、燦爛たる數箇の勳章を、胸間に懸け、肅然として、天に向ひ、「神よ、願くは、わが英國に、赫々たる大勝を授け、全歐洲の人民を、その塗炭の苦より救ひ給へ。願くは、わが將卒をして、一人も、卑怯の舉動をなすものなからしめ給へ。併せ願くは、戦勝後、わが軍の、事を處する、一に、仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身、固より、惜むに足らず、ただ、わが忠誠を憐みて、應護を垂れ給へ」と禱りて、やがて、甲板に出でたるに、敵艦、いよいよ近づく。英軍の意

本分
狂喜
拍手喝采
莞爾
率先

氣、ますます壯なり。ネルソン、また、ブラックウッドを顧みて、「なほ、一信號旗の掲げざるべからざるものあり」として、直に、信號兵に令し、信號旗を、檣頭に掲げしむ。その信號は、英國は、期して、各自が、その本分の職を盡すを待つ」といふことなり。英國總艦隊、これを望みて、狂喜措くこと能はず、拍手喝采の聲、海波も、ために震はんとす。ネルソン、莞爾として、「今は、はや、準備において、遺憾なし。餘は、たゞ、神と、わが正義とを頼まんのみ」といひしが、やがて、「接戦せよ」との信號旗は、檣頭たかく掲げられたり。旗艦ビクトリー號、前驅率先して進み

軒昂
眉宇

しが、著弾距離に達するや、數隻の敵艦、これに向ひて、砲撃をはじめ、飛弾、こもごも、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウッド、その本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつゝ、「余は、また、速に、本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる、閣下の壯貌を拜すべし」といへば、ネルソン、「われは、既に、國家の爲に、一身を、犠牲にせんとせり。再び相語ることを期せず」といふ。意氣軒昂、爽快の色、その眉宇の間に溢れたり。

一九、トラファルガルの海戦その二

健帆

時に、副提督コリングウッドの旗艦ローヤルサベ
 レーン號は、その隊の先登に立ち、健帆、風を孕みて、西
 班牙の戦艦サンタアナ號に向ひて進みしが、その
 艦尾に達するや、二弾を重填せる左舷の大砲を、一齊
 に發射し、忽ち、これを撃破せり。ネルソン、遙に、これを
 望み、欣然として、左右を顧み、好丈夫の意氣を見よ。猛
 烈、鬼神の如しといふ。既にして、佛の諸艦、皆、ビクトリ
 ー號を目蒐けて、進み來りしかば、飛彈、實に、急雨の如
 く、艦體破壊し、索具斷絶し、兵士の戦死するもの、頗る
 多かり。然れども、なほ、堅く忍びて、一發も應砲せず。ま

欣然として
好丈夫

看破
猛然

すます進みて、佛の提督ビールヌーブの旗艦をもと
 む。ビールヌーブ、これを避けんがため、殊更に、將旗を
 掲げざりしかど、ネルソン、その陣形よりして、第二位
 にあるブーセル號の、旗艦たることを看破し、猛然、こ
 れに薄り、まづ、艦窓に向ひて、小銃五百の一齊射撃を
 行ひ、續いて、三弾を重填せる、左舷の大砲を、一時に發
 射せり。波濤驚き、雲霧裂け、その音、百雷の、一時に落つ
 るがごとく、敵兵四百、算を亂して、殪れ、二十門の巨礮
 毀損し、艦體大破して、また用ゐること能はざるに至
 れり。

算を亂す

衝突

こゝに、ネルソン、いよいよ奮戦して進み、右舷の諸砲を以て、別に、敵艦レゾータブル號を砲撃しつゝ、遂に、これに衝突せり。この時に當り、英の諸艦長、各猛進して、佛艦と接戦し、兩軍の戦、正に酣にして、奮鬪、殆ど一時閒ならんとするをりしも、レゾータブル號の檣樓より、一發の銃丸飛び來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて、これを倒せり。衆駭きて、相集り、直に、ネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーデーを見て、「佛奴、われを狙撃したるがため、彈丸、わが脊髓を貫けり。恐くは、また起つ能はざるべし」といふ。か

狙撃

沮喪

くて、ネルソンは、わが負傷の一事、徒に、兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に、手巾をいだし、わが面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて、治療室に入りぬ。

卻(却)

時に、レゾータブル號の兵士、艦上に、襲撃隊を組み、將に突入し來らんとす。英兵、急に、小銃を亂射して、これを卻け、なほ、大小砲を連發して、その過半を殲ししかば、彼等は、力つきて、遂に降伏せしが、續いて、敵艦の、その旗章を下して、降を乞ふもの引きも切らず。ビクトリー號の兵士拍手して、歡聲、雷の如し。ネルソン、治療室にありて、これを聞き、思はず、笑をもらせり。

指揮 殘喘

ハーデー、たまたま、ネルソンの側に來り、「捕獲の敵艦十二隻に下らず」といへるに、ネルソン「わが艦の敵に降れるものなきか」と問ふ。ハーデー、聲に應じて、「一隻もなし」と答ふ。ハーデー、やがて、甲板に上り、一時間を経ずして、再び訪ひ來れるに、ネルソン、その艦隊を、して、投錨せしめんと、の念切なりしかば、その事を、ハーデーに命ず。ハーデー「艦隊の運動は、副提督コリングウッドの指揮に任せ給へ」といひしに、ネルソン、頭を振り、「苟も、わが殘喘、なほ存する間は、何ぞ、指揮の權を、他人に委せん」といふ。既にして、薄暮に至り、佛西兩

奄々 瞑す

國の聯合艦隊大敗して、砲聲、全く收り、ネルソンの氣息も、また奄々たり。左右、口を、その耳朶にあて、「全勝、わが軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり」と報ぜしに、ネルソン、莞爾として、遂に瞑せり。(小笠原長生—帝國海軍史論)

二〇、ネルソンの鸚鵡

トラファルガルの海戦に、ネルソンの戦死したことは、世界各國、知らない者はあるまいが、當時、ネルソンが、艦内に、一羽の鸚鵡を飼つてゐたといふことは、恐く、誰も知るまいと思ふ。

この鸚鵡は、至って、人語が巧で、號令の眞似でも、報告の眞似でも軍歌の聲色でも、はては、將軍の咳拂までまねる位であつたから、艦内一の愛嬌者になつて非常に可愛がられてゐた。

ところが、いよいよ、トラフルガルへ來て、彼の大海戰の段になると、たれも、この愛嬌者の相手になつてゐる暇はないから、忘れるともなく、うっちゃつておいたが、やがて、戰鬪がすんでから、安否如何とあらためて見ると、あはれ、ネルソン將軍は、名譽の戰死を遂げられたが、その愛禽なる鸚鵡先生、不思議に、流弾に

遺愛

も中らず、無事で、籠の中にすましてゐた。

かうなると、この鸚鵡も、名將の遺愛といふので、前よりもなほ、非常にもてはやされたが、何思つたか、彼自身は、その後、まるで、啞のやうに、人が呼びかけても、返事もしない。

喪を守る

さては、將軍の死を悼むのあまり、所謂、喪を守るといふわけで、かう黙り込んでゐるのだらうかと思ふと、一層、可愛さが増して來て、將軍の遺族のものは、前より大切に飼つておいた。

日のことであつた。

ネルソン家の面々は、うち揃つて、墓參をして、やがて、家へ歸つて來ると、こは如何に、奥の一室で、おそろしい大砲の音、

「ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん。」

と、凄まじい有様だから、何事かと思つて、飛んでいつて見ると、そこに置いてあつた鸚鵡先生、籠の中で、大口を開いて、今や、大砲の聲色最中、人々呆れて見てゐると、鸚鵡は、やがて、一聲高く、

「やっ 殘念……ネルソンは死んでも、英吉利の海軍

は死なんぞ。 うむ……。(巖谷季雄「笑の國」)

二一、四季(清水濱臣)

春もなかばは、 すぎの戸を、

おしあけ方に、 見わたせば、

軒端の雲は、 さくらにて、

そぼふる雨こそ、 香にほへ。」

そぼふる

しきる

雲間のつきも、 やどるなり、

くひなの聲も、 しきるなり。

たちばな薫る、ゆふ風に、
岩もるしみづ、すゞしくて。」

あきふく風の、ばせを葉に、

ふたこゑ三こゑ、おとづれて、

まどより西に、つき影の、

かたぶく見るこそ、あはれなれ。」

冬ごもりせる、雪の夜に、

ねやネヤのうづみ火、かきおこし、

炭やくしづが、なりはひを、

おもへばいとこそ、身は冷ゆれ。」

二二、良夜

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆七月十五夜なり。
月清く、風涼し。

夜業の筆をおき、枝折戸開けて、十五六歩、邸内を行
けば、栗の大木、眞黒に茂れる邊に出でぬ。その陰に、井
戸あり。涼氣、水の如く、闇中に浮動す。時々、白銀の雫の、
ほたりと墜つるは、誰が、水を汲みて去にしにか。

浮動

溶々

桑(葉)

さらに行きて、畑の中にたゞずむ。月は、いま、かなたの大竹藪を離れて、清光溶々として、上天、下地にみちたり。星の光、何ぞうすき。冰川の森も淡くして、煙と見ゆめり。靜に立ちてあれば、わが側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて、青びかりに光り、棕櫚は、さやさやと、月にさゝやく。蟲の音しげき草を踏めば、月影、爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。藪のあたりには、しきりに、鳥の聲す。月のあかきに、彼等も、え眠らぬなるべし。

開けたる所は、月光、水の如く流れ、樹下は、月光、青き

夢よりも美なり

雨の如くに漏りぬ。歩を返して、樹蔭を過ぐるに、燈火の影、木の閒をもれて、人の、夜涼に語るあり。枝折戸閉ぢて、縁に踞するほどに、十時も過ぎて、往來、全く絶え、月は、頭上に來りぬ。一庭の月影、夢よりも美なり。

月は、一庭の樹を照し、樹は、一庭の影を落し、影と光と、黑白斑々として、庭に満つ。縁に、大なる楓の如き影あり。金剛纂の落せるなり。月光、その滑なる葉の面に落ちて、葉は、さながら碧玉の扇と照れるが、その上に、また、黒き斑點ありて、ちらちらと躍りぬ。李樹の影の

映れるなり。

風の梢をわたる毎に、一庭の月光と、樹影と相抱いて跳り、白ゆらぎ、黒さゝめきて、その中を歩する身は、これ、無熱池の藻の間にあそぶ魚にあらざるかを疑ふ。(徳富健次郎―自然と人生)

二三、京城

京城は、韓國皇城の在る所なり。その地形、ほゞ、我が京都の、比叡、鞍馬、愛宕、嵐山を繞したるが如し。北漢山の麓に、昌徳、景福の兩王城あるは、東山の麓に、祇園、清

規模

水、知恩院あるが如し、南山の半腹に、茶屋の軒を列ねたるは、嵐山、嵯峨、御室わたりの規模を小にしたるかと思はる。

市街の中央を流るゝ川に、五大石橋を架し、その河積に、白き衣を曝せる所、何ぞ、その趣の、わが賀茂川に似たる。その川水の流れて、漢江に注ぐは、賀茂川の末の、淀河に注ぐとも見つべく、婦人の頭に、物を戴きて歩行するは、大原女にも似たるかな。

京城の家屋は、概して粗末にして、わが京都に比すべくもあらねど、昌徳、景福兩王宮の庭苑の廣くして、

遜色

雅致に富めるは、我が大宮御所の御苑に比べて、甚しき遜色無からん。

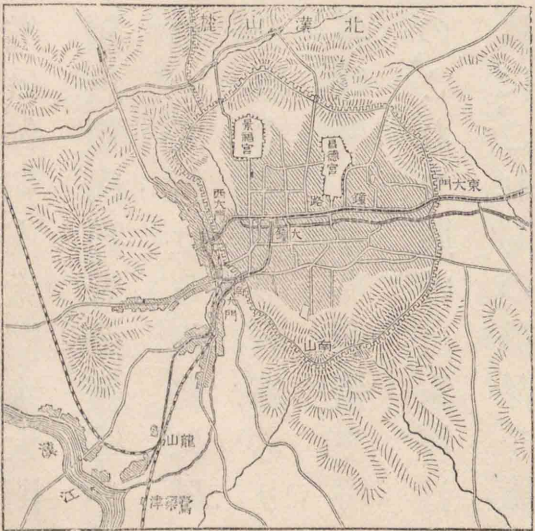
京城は、一に、漢城と稱し、李朝建國五百年來の都府にして、方今、戸數四萬、人口約二十萬に達せり。韓國第一の大都會なり。その周圍は五里餘にして、高さ、十尺、乃至二十尺の城壁を繞し、八箇の城門を設けたり。

矮陋

市街は、中、東、西、南、北の五署に區劃し、市區井然たり。されども、道路は不潔に、家屋は矮陋にして、外來の人をして、かくても首都なるかと疑はしむ。たゞ、東大門より、西大門に通ずる大道と、南大門より、鐘路に到る

肩摩轂擊

大道とは、道幅、十間、乃至二十間ありて、我が京都に見ざる大街路たり。



の大鐘を置き、古來、毎夜七八時の頃と、午前三時とに

市街の中心たる鐘路は、常に、白衣の土人を以てみたされ、車馬輻湊、肩摩轂擊して、商業、甚だ盛なり。その、名づけて鐘路と呼ぶは、四辻の一隅に、高さ一丈餘、周圍二丈餘

老舗

は、必ず、これを撞くを、慣例とせるに由る。元來、京城の商業は、毎朝、南大門、東大門などの内に、市場を開きて、穀類、魚類、肉類、野菜類等を商ふ外は、多くは、この鐘路において行はる。鐘路には、絹、木綿、苧、麻、紙類、乾魚、鹽魚等を販ぐ、常住の老舗ありて、賣買、盛に行はる。これらは、各政府より、專賣權を得たるものにして、その他の者の、これを販げば、家屋は沒收せられ、かつ、獄に下さる。故に、これらの商品を販賣せんとするものは、免許料を納めて、その組合に加盟する外なしといふ。

場(場)

試に風起して、南大門内の市場に到らんか、白衣の

鶏(雞)

喧囂

土人は、廣き道路を填めて、魚類を販ぐ者あり。野菜を陳列する者あり。扇形の籠に入れたる鶏を負ひて、立賣する者あり。これらを買はんとする者あり。長き煙管をくはへながら、立ちて見物する者あり。松枝を、牛背に載せて、高く呼びつゝ、ゆく青年あり。頭上に、水壺を戴いて、群集を押し分けゆく婦人あり。電車は、鐵路を馳せて、この群集中を、頻繁に來往す。雜沓、喧囂、いはん方なし。(坪谷善四郎、韓國寫真帖)

第學期七月一日午前十時之終ル

二四、海外の一知己

一夕、勝海舟翁を、冰川邸に訪ひました。ところが、話は、たまたま、丁汝昌のことに及びましたが、翁は、口を開かれて、

知己

「丁汝昌は、自分が、海外の一知己であつたが、日清戦争の時に、とうとう自殺してしまつた。當時、自分は、今昔の感に堪へず、病氣を推して、こんな文章を書きかけた。

今昔の感

二十八年二月十二日、丁汝昌、その率ゐるところの軍艦に、降旗を掲げて、われに降るといふ。ある人、その可否得失を論じて、余が意見を問ふ。余、思ふ旨あ

自盡

將來を期す

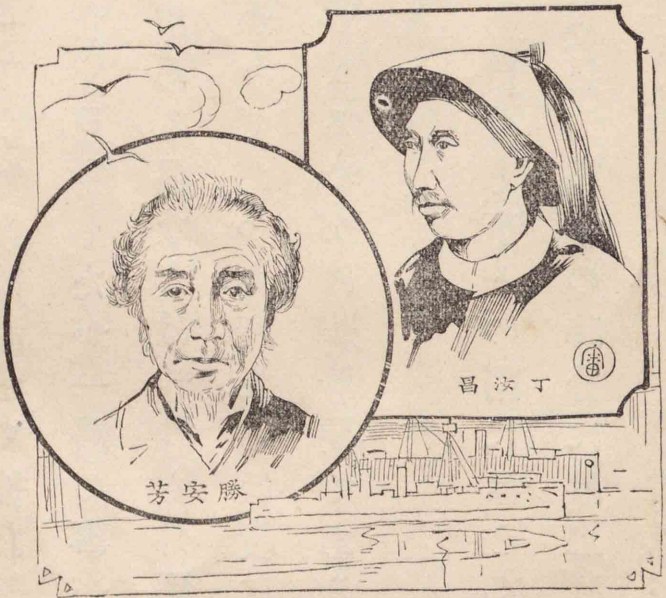
りて、答へず。その後兩三日、丁は、いよいよ降るべき順序を了へて、自盡せりといふ。余、彼の心中を思ひ、歎息措くこと能はず。思へば、彼が、我が國に來りし時、余が家を尋ねきて、共に相語れることありき。こゝまで書いたところが、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛がしたものだから、止むを得ず、それなりにしたが、今、そのつゞきを、口で話さう。かつて、丁が、支那、當時の海軍に就いていふには、今日、我が國の海軍は、いかに、見所がなく、おはづかしい次第だが、拙者は、唯、將來に期する所があつて、聊か、

幕末

みづから奮勵して居るばかりだ。拙者は曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて、英國へ留學し、同國の士官に就いて、少しく、海軍の事を學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やうやう、今日の海軍を創設したけれども、これは、只、兒戲に過ぎない。その事は李氏も、承知と見えて、今日の海軍は、何の役にも立たない。たゞ、今後十年を期して、大成さすべきだ」と、常々われわれに云って居る。拙者は、曾て、貴著、海軍歴史を讀んで、君が、幕末から、王政維新の際にかけて、海軍を經營せられた閱歷と偉勳とを承知し、拙者が、今日の

境遇

敬慕



その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せられ、い

境遇に比べて、しきりに敬慕致して居る」といった。丁のいふところは、その語は、甚だ謙遜で、その望は、甚だ遠大であるから、自分も感心して、海外に、一知己を得たのを喜び、いろいろ、こなたの考をも話した。

劍(劍)

整頓

ろいろ、丁寧な饗應を受けたが、自分は、一首の和歌を、一口の寶劍に添へて、彼に贈った。そして、艦内、残る限なく見物したが、一體の事が、なかなか整頓して、日用ゐる品などは、一つも、外國製のを用ゐず、支那製ばかりであつた所などは、實に感心した。今後、總べて、かゝる心がけが肝要であるといつたら、彼は、よく聽き入れた。

消息

自分と、丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戦争の時分には、思は、始終、北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が、氣にかゝつた。また、あの

緣故

晴の舞臺

時の聯合艦隊の司令長官であつた伊東中將も、昔、神戸で、自分の塾に居た緣故から、一生一度ともいふべき晴の舞臺に上つたから、どうか、日本海軍の名譽と、一身の手柄とを立てさせたいと思つて、當時、自分の胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど、千々に碎けた。

處置
非難

然るに、威海衛の海戦は、敵、味方とも、このうへない名譽を耀し、世界の海戦史上に、ひと花咲かせたと聞いて、自分は、實に嬉しかつた。伊東中將の事は、いはぬ。丁が、あの時の處置は、實に、一點の非難すべき所もな

新事例

く、海戦上に、一箇の新事例を教へたといつてよい。陸戦の時、あの様な場合に處する例は、これまで、いくらもあつたけれど、世界に、海戦といふ程の海戦が、音からなく、従つて、あんな場合も少かつたから、これに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に、戦鬪力を失つた艦長が取るべき模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戦史の秋の野に、一の紅花を點じたのだ。

およそ、人間が、何事にか激した時には、死ぬには、譯もない事だらう。しかし、よくよく、事局の前後を達觀

蕭條

事局
達觀

善後の策

要素
秀才

面目

して、十分に、善後の策を立て、然るのち、從容として、死に就くは、決して、容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇のごときは、部下には、數年來、苦心養成した所の、他日、支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には、いろいろ、面倒な事をいひ出す雇外人があり、是等の處置をつけねばならぬ。むしろ、斃れるまで奮戦しようかといふと、かの二百名の秀才を殺さなければならぬ。それでは降参しようかといふと、自分の良心は、どうしても許さない。そこで、丁は、沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、かつは、

雇外人への義理から、一身と軍艦とを犠牲にして、顧みなかったのだ。その心の中は、實に憫むべきではないか。

涙ぐむ

と聞いて、翁は、涙ぐまれた。その話のあとを聞きたくも思ひましたが、日も、全く暮れたことゆゑ、暇乞して、歸途に就きました。(勝海舟談話筆記)

二五、 船室の記

わが乗れる船は米船にて、六層より成れり。第一層は甲板にして、この中に、書籍室、喫煙室あり。第二層、第

三層は客室なり。食堂は、第三層の中にあり。湯殿、化粧室、これに添ふ。それより下は、下等室、及び、荷物庫なり。第一層の上に、更に、船橋を設く。こゝは、機關師の外は、上ることを許さず。

閱覽

書籍室は、船の前方にあり。およそ二十疊を敷くべし。目錄を備へて、自在に閱覽する便を與ふ。椅子、テーブルは、行儀よく並べありて、自由に、これを使用することを得るのみならず、インキ、ペン、用紙、状袋をさへ備へたり。その他、新聞、雜誌の備もありて、居ながら、歐米各國の近状も知らるゝなど、一たび、こゝに入り、讀

備(備)

書に、心を籠むる時は、われながら、洋上の旅客たるを忘らるゝなり。

碁(棋、碁)

喫煙室は、船の後方にあり。これも、およそ十四五畳を敷くべし。いづこにも、山水などの額を掲げたり。椅子、テーブルは、例に依りて並べられたれば、喫煙の外に、トランプをもなすべく、將碁をもさすべきなり。

客室は、廣きは、十畳より八畳ばかり、狭きは六畳ばかり、二人、若しくは、三人を容るべし。寢臺は、壁に倚りて附けられ、底を、鐵網にて張り、下に、藁蒲團を敷き、更に、毛布數枚を重ねて、これを被ふ。鏡臺、手洗鉢、二人を

容儀

清潔

容るゝ處には、必ず、二臺を備へ、三人を容るゝ處には、必ず、三臺を備ふ。又、テーブルあり、腰掛あり、箆笥あり。朝起き出でて、手洗ひ、口嗽ぎ、鏡に對ひて、容儀を整へ、などして、外に出づるほどに、ボーイ、必ず來りて、そのあとを掃除し、夜具の如きは、昨夜のと更め置かれて、その清潔なる、いふばかりなし。

食堂は、廣さ、百畳をも敷くべし。食卓、椅子、正しく並びたり。食事毎に、ボーイ、客に、活版摺なる獻立書を渡す。その種類、およそ三十品内外なり。客は、好に依りて、それぞれ申し付くるに、忽ち、その品を運び來るなど、

旅愁

その迅速なること、愕くに堪へたり。船體、やゝ動搖する時も、ボーイは、巧に歩いて、スープ、ボミネー等を持ち運ぶに、少しも過つことなし。この室の奥には、美麗なるピアノを備へて、乗客をして、これを弾じて、その旅愁を慰めしむ。

湯殿は、化粧室と相鄰れり。湯桶は大理石にて、船形なり。水、或は湯と記したる栓を引けば、わが思ふまゝの加減に湛ふることを得べし。浴し了ふれば、底の方より流れ去るやうにせり。

化粧室には、大理石の間に、水盥を、數多置き並べた

り。例の、向より出でたる、小き栓を捻れば、水は迸り出でて、見るまに、盥に満つ。また、洋銀にて製せる、筒の如きもの、盥の上ごとに、必ずさし出でたり。これは、石鹼を、粉にしたるを納れたるものにて、拇指にて、その、小く出でたる處を押せば、さらさらと出づるを、手に受け、やがて、水に和して、洗ふやうにせり。

船中、寒ければ、煖爐に、火を焚きて、冬あるを忘れしめ、暑ければ、電氣仕掛の煽風器を据ゑて、夏あるを忘れしむ。嗚呼、文明的航海の業も、こゝに至りて極れるか。余は、これを、船といはんより、むしろ、太平洋上の極

器(器)

極樂園

樂園といはんとす。歐米人の旅行を以て、快樂の一に
數ふるも宜ならずや。(池邊義象―佛國風俗問答)

二六、小笠原嶋通信

一書拜啓仕り候。今回出發につき、萬事御配慮を
蒙りし段、深く謝し奉り候。五月十五日午後二時
半、横濱を出發致し、途中兩日ほど、風雨強く、少々
困難仕り候へども、常に、追手の風にて、船の駛る
事、一時閉、平均八海里位の割にて、同月廿二日、當
小笠原嶋に著仕り候ひき。著後、風なく、たまたま

有利



あるは南風にて、出帆するを得ず。いづれ、近日、南
洋へ出發の運に相成るべしと存じ候。

當嶋は、
よほど
有利の
地なる
やうに
聞き及
びしか

ども、實際は、大に、これに異り。瘠地にして、かつ、山

有望

阪おほく、平地はなほだ稀なれば、決して、有望のところにあらず。たゞ、氣候、内地と異にして、パイナップル、芭蕉の實なども出来、また、咖啡、タコの木、そのほか、内地の人の目に新しきものあるが故に、かくは申し觸したることと思はれ候。たゞ、父嶋の港は、非常に宜しく、若し、南洋の通商繁昌するに至らば、この嶋は、薪水の爲に、是非とも碇泊せざるべからざる所なれば、従ひて、政治上においても、決して放擲すべからざる要港に、これあり候。

申し觸す

通商

輕視

小生は、これまで、随分、海運の事など議論致し候ひしが、船に乗りたることは、極めて稀にして、この度のごときは、船中、随分、困難を極め候ひき。しかし、今日は、氣力、全く回復し、向後の航行は、懼るに足らず候。歸朝までには、ひとかどの船乗と相成るべく、樂み居り候。

蒸氣船と風帆船との得失如何は、實に、海國たる日本の爲には、重大なる問題と考へられ候。小生、これまで、海事に通ぜず、風帆船を輕視せしが、今日までの實驗にて、非常に宜しきものなること

決斷

歸化人

掌大の地

蓄積心

を知り候ひぬ。畢竟、この航海を終了せば、日本人は、いかなる船舶を以て通商するが適當なるべきかの決斷を得べしと存じ候。

當嶋の歸化人は、米國人、もしくは、カナカ人種、もしくは、その混合種にて候。みな徒跣にて、土上を歩み、多くは、カヌー船にて、正覺坊を取り、また、掌大の地に、玉蜀黍を植ゑて、その生計を立て居り候など、文明人の末にも、かくの如き者あるかと、怪まるゝ程に候。しかし、蓄積心は、内地の人に比すれば盛にして、その金庫の内には、許多の貨幣

を藏せるものありとのことに候。

當今の暖氣は、日中八十二三度にて、随分暑けれど、夜に入れば、涼風吹き來て、眞に、爽快をおぼえ候。沿岸に、油桐といふ樹あり、葉茂りて、鬱々たり。この嶋にて、暑を凌ぐを得るは、全く、この樹のため候。小生、身體強健にして、内地に居りし時よりも、氣分、常に愉快なり。御安心下されたく候。

匆々頓首。(田口卯吉)

強健

二七、殊勝なる武者振

世祿の歴々

徳川秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功のほまれありし者を、厚祿にて、召し抱へられけり。また、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴々なりしが、嫡子に、鎧の著初せさせけるに、かの掃部を招待して、子に、鎧を著することを頼みけり。さて、饗膳いて、祝の盃に及びし時、伊勢、今日は、愚息が、鎧の著初にて候ふまゝ、御身の御武功の事、御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へ」といひしに、掃部、「いや、某が身の上に、御話し申すべき程の武功も、覚え申さず候ふ。されど、御望黙し難く候ふまゝ、某、一生の内に、武者振の見事を

饗膳

御不祥ながら

る士を、一人見申して候ふ。その事を御話し申すべし。江州志津が嶽の戦に、暮方に、某一騎、余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより、詞をかけし故、馬を引き返し候へば、その人申し候ふは、「今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ。御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら、御相手になり申すべし」とて、進み寄り候ふ故、「それこそ、こなたも望む所にて候へ」と、互に、馬を乗り放ち、既に、槍を合はせんとしけるに、その人、「しばし御待ち候へ。今朝より、雑兵を、多く突き崩し候ふ故、槍よごれて候ふ

物のあやめ

わりなし
入魂

まゝ、槍を洗ひ候ひて、御相手になり候はん』とて、余吾の湖に、槍をうち浸し、二三遍洗ひつゝ、『さらば』とて、突き合ひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れ果てて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより、又詞をかけ、『もはや、槍先も見えず候ふ。御名、残多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は、青木新兵衛と申す者にて候ふ』とて、某が名をも承り候ひて、『この後、また陣頭にて出で合ひ候はば、互に、人手にはかゝり申すまじく候ふ。もしまた、味方にて候はば、わりなく入魂致し候ふべ

浪士

蹂る

浮きたる事

し。さらば』とて、立ち別れしが、これ程見事なる武士は、遂に見侍らず。いかゞ成り果て候ふにか』と語りけるに、そのころ、伊勢がもとに、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たりしが、この物語を聞きて、蹂り出でつゝ、掃部に向ひ、『さても、只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落して候ふ。その時の御相手になり候ひし青木新兵衛は、はづかしながら、われ等にて候ふ。かく申すばかりにては、浮きたる事におぼすべく候はん』とて、その時の、雙方の鎧の緘、馬の毛色を、一々いひけるが、一つも違はざりけ

本望

引く

れば、掃部愕きつゝ、「さては、久しくて逢ひ候ひて、本望に候ふ」とて、手前にありし盃を、方齋にさし、これをしるしにとて、腰の脇指をぬきて、引きけり。それより、方齋が名國に高くなりしほどに、秀康卿の耳にも達せしかば、遂に、掃部とおなじ祿にて、召しいだされたりき。(室直清—駿臺雜話)

二八、同情

米國の、政事家、法律家として名高きダニエル、ウエブスターが、なほ幼かりし頃の事なり。兄某が、一疋の

作物

鼯鼠を捕へて、殺さんとしけるを見て、憫に思ひ、「善惡の辨なき獸を殺さんはむごし。命を助けて、放ち給へ」といふ。兄いはく、「然らず。こやつは、しばしば、我が家の畑を荒し、作物を害せり。今殺さずば、復更に、同様の害惡を重ねべし」と。ダニエル、重ねていはく、「兄上よ。世に生きとし生けるもの、物食はでは、生活する能はず。兄上が言はるゝ、害惡も、彼に取りては、食を得ん爲の、止むを得ざる働のみ。よしや、眞に惡事なりとも、死に當るほどの罪にはあらじ」と。

押問答

兄弟の押問答は、父の耳に入りぬ。父は、兄弟に向ひ、

原告
被告
公判

天分

「雙方とも、言ふことに、一理あり。われ、裁判官とならん。兄は原告なり、ダニエルは辯護士なり。鼯鼠を被告として、こゝに、公判を開くべし。原告たる兄の申立はいかにまづ、それを聽かん」といふ。兄は、すなはち、

「父上よ、否、判事閣下よ。被告は、土中に棲息するを、天分とす。然るに、かれ、時には、土上に出て來り、その際、田畑の土を浮かせ、蒔きたる種を覆し、作物の根を緩め、甚しきに至りては、これを食ふ。農事を害すること甚し。この間も、わが父の畑を穿ちて、蜂の巢の如くし、剩へ、馬鈴薯の大なるを擇びて食へり。こや

狡猾の度
を加ふ
後患

せめてもの

料

寛仁

つの如きを助けおかば、今後の害は、一倍たるべし。かつ、經驗によりて、狡猾の度を加ふべければ、再び捕ふることに困難ならん。すべからず、今殺して、後患なからしむべきなり。又、一つには、せめてもの償に、その皮を剥ぎて、何かの料とせん。

と、辯舌激まず、滔々と述べければ、父の判事も感心したる體なり。その時、ダニエルは、徐に、口を開き、

「寛仁なる判事閣下よ。願くは、まづ、被告が、現境に陥りたる原因を察せらるべし。彼等とても、有情の動物なり。天地間に生まれ出でしうへは、生を保つ權

暴戾

賢明
情狀

利を有すべき道理なり。かつ、彼等は、虎狼などの如き暴戾の動物にあらず、生活せしめん、に、何ほどの害かあらん。原告は、『害害』と呼べども、被告が、生を保つ必要上より食ひしは、僅に、物の根のみ、菜根、草根のみ。人間に取りて、幾許の害ぞ。彼は、悪と知りて爲ししにあらず、性に隨ひて然せしのみ。悪と知りて、悪を爲ししものこそ、悪むべけれ、性に隨ふものを罰すべけんや。人は、萬物の長ならずや、かばかりの自由を、下等動物に惜みて、その生をすら奪はんとするか。賢明なる判事閣下よ、被告の情狀を察せら

慈悲
判決

れて、慈悲の判決を賜へ。

と。至誠面に溢れ、慨然として述べけり。辯護の半より、判事の目は潤ひぬ。ダニエル述べ了りて、父の面を見上ぐれば、父は、涙を落しつゝ、聲さへも震ひて言へり。
「兄よ、鼯鼠を放て、放て」と。(坪内雄藏)

二九、古今傳授松

鶴(鶴)

堪能

丹後の國なる田邊の舞鶴城は、天正の昔、細川三齋の築けるものにて、その父、幽齋の居城たり。幽齋は、弓矢の道はさらなり、和漢の學に通じ、殊に、歌の道に堪

秘訣

能なりしは、世のあまねく認むる所なり。嘗て、九條植通より、源氏物語の奥義を受け、三條西實枝より、古今集の秘訣を傳へられしが、その後、公卿に、その人なく、これを知れるものは、たゞ、幽齋一人のみ。

慶長五年の秋、石田三成、兵を遣して、舞鶴城を圍む。城兵僅にして、防ぐべくもあらず。幽齋、心に決する所あり。後陽成天皇、これをきこし召され、幽齋の失せなんには、歌道も亡びなんとて、いたく歎かせ給ふ。皇弟智仁親王、使者もて、「和議を調べ、はやく、城を出てよ」と諭さしめ給ひしに、「ありがたき仰にはあれど、生きな

古も今も
古も今もか
はらぬ世の
中に心の種
を残す言の
葉。」



がら、城を、敵に渡さんこと、武士の本意にあらず」とて、たゞ、その御使に託して、古今相傳の箱に、「古も今も」といふ歌添へて、上れり。されど、なほ、その人を惜ませ給ひ、しばしば、内使を下して、和議の沙汰に及ばれしかど、容易に、その決心を翻さざりき。こゝに、敕使として、三條西實條、中院通勝を大阪へ、烏丸光廣を田

沙汰
敕(勅)

叡慮
旨(旨)

邊へ遣され、ことに、光廣には、前田義勝を伴はしめて、あらためて、叡慮の旨を諭さしめ給ひしに、幽齋、今は、拒み奉ること協はず、城を、義勝に渡し、わが身は、龜山に出でゆきぬ。あとにて見れば、園の老松の下に、古今傳授松の五字に、玄旨とするしたる札、残り。こは、これ、古今相傳の書類を、親王の御使に渡したるところなりきといふ。

寛文八年、牧野親成、城主となりしが、その時までには、その札の存せしかば、やがて、その歌の句のことばをとり、その園を、心種園と稱し、代々、これを敬慕、珍愛せ

遺蹟

追慕

られて、明治の御世に至りぬ。かの松は、文政の末に枯れ、そのあとに植ゑたる松も、廢城の折なくなれり。

こゝに、この地の心ある人々、その遺蹟の埋没せんことを恐れて、更に、また、松を植ゑ、碑を建てんとす。余は、その子孫なり。追慕の情に禁へず。謹みて、そのゆゑよしを記しぬ。(細川護成)

明治四十二年十月

新訂中等國語讀本卷三終

明治三十九年二月二十六日
 明治四十年一月十四日
 明治四十一年十一月四日
 明治四十二年一月二十五日
 明治四十二年一月二十八日
 再訂第二版發行
 再訂第二版發行
 再訂改版發行
 再訂改版發行
 新訂再版發行
 新訂再版發行

新訂中等國語讀本
 全十冊
 定價 各金貳拾五錢



著者 故落合直文
 相續者 落合直幸
 補修者 文學博士 萩野由之
 補修者 醫學博士 森林太郎
 印刷者 兼 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平

發行所
 販賣所

東京市神田區錦町一丁目
 〔長電話本局二四三八番〕
 東京市神田區南乗物町
 〔長電話本局八九二番〕
 〔電話本局一六四番〕

明治書院
 明治圖書株式會社
 〔振替貯金口座東京四九二番〕
 〔振替貯金口座東京四九二番〕



